

# 身延山における日蓮聖人

— 弘安元年の秋と冬 —

上 田 本 昌

## 一 弘安元年の秋（九月）

身延の嶺に秋風が吹き、夜長の候となった頃、駿州岡宮の妙法尼から一通の書状が、供養の品（ちかみぼら太布帷一つ）に添えられて届けられた。その書状には、「おはり（尾張）の次郎兵衛殿、六月二十二日に死なせ給ふ」ことが記されていた。この次郎兵衛と云う人は、妙法尼の兄に当り、北条尾張守公時（又は時章）であると云われている。妙法尼自身については、『録内啓蒙』によると、「妙法尼は甲州にて或檀方後室の尼公なりと云云」<sup>(1)</sup>とあり、また「健抄には甲州の女中と見へたれども、入文に古郷の事を懇に遊せるを以てみれば、房州の人なるべき歟。」とも記されている。従って詳しい伝記は不明であるが、「あによめにて候女房」と共に、宗祖に帰依していたことは事実である。<sup>(2)</sup>又妙法尼は（本誌先号A48号Vにてふれた如く、）此の年に夫を亡くしているのである。

宗祖はこれに対し、九月六日付で御返事を記されている。付法蔵經第三卷の商那和修が、商那衣をまといて出生し

たと云う因縁を述べ、更に宗祖自身の出家・修学にふれている。この中で「仏御入滅ありては既に二千二百二十七年なり」と仏滅後の年数を明示している。即ち末法に入つて二百二十七年目に相当することになる。これについては、<sup>(3)</sup>此の年の八月に日頂上人に授与された曼荼羅の讚文には「仏滅度後二千二百三十九年之間一閻浮提之内未曾有大曼荼羅也」とあり、又同年の「後十月十九日」付の曼荼羅には、「仏滅度後二千二百二十九年云云」と記されている。<sup>(4)</sup>その他の此の年間に授与された曼荼羅を見ても、「二十余年」とされたのは右の一幅のみで、あとの七幅は「三十余年」となっている。<sup>(6)</sup>何れにしても宗祖は、仏滅後二千二百二十九年、又は三十余年を経ていると云う立場をとられていたことは事実であるが、此の御書のように、「二十七年」と云う明示の仕方は、弘安元年中の曼荼羅では見ることができない。

次に宗祖は、「此度いかにしても仏種をも植へ、生死を離るる身とならんと思ひて、」と出家の動機を示し、「皆人の願はせ給ふ事なれば、阿弥陀仏をたのみ奉り、幼少より名号を唱へ候し程に、」と当時流行していた弥陀の称名を唱えた一時期のあったことを記し、更に「いささかの事ありて、此事を疑ひし故に一つの願をおこす。」と修学発願を挙げ、「所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に」二十余年間の研鑽が続けられたことを述べている。即ち仏教の肝要を把握することが主眼であり、修学の究極であった。その結果、「法華経と釈迦仏」は、一切衆生の主・師・親であるとし、これに反する日本国は、すでに大謗法の国となり、他国によって亡ぼされることになるであろうと説いている。

また、この旨を故最明寺入道に申し入れたが聞き入れずに、迫害を加えて来たことを述べ、「去ぬる文永十一年五月十二日相州鎌倉を出でて、六月十七日より此深山に居住して門一町を出でず。既に五箇年をへたり。」<sup>(7)</sup>と、現在に

至るまでの経過を概説している。この「門一町を出でず」と云う言葉からすると、入山されて西谷の草庵に居住されてからは、ひたすら読・誦・解説・書写に専念され、山を出ることはなかったように受取れよう。既に五年を経た身延の状況を次のように表現している。

「北は身延山と申して天にはしだて、南はたかとりと申して鶏足山の如し。西はなないたがれと申して鉄門に似たり。東は天子がたけと申して富士の御山に対したり。四の山は屏風の如し。北に大河あり。早川と名づく。早き事箭をいるが如し。南に河あり。波木井河と名づく。大石を木の葉の如く流す。東には富士河北より南へ流たり。千の銚をつぐが如し。内に滝あり、身延滝と申す。白布を天より引くが如し。此内に狭小いさよかの地あり。日蓮が庵室り。」

と四山四河を中心に草庵の所在を示し、続いて深山幽谷なれば訪う人もなく、命もつぎがたきところへ、衣を送っていただいて、何んとも申し上げられない程であると感謝の意を表している。「見し人聞きし人だにもあはれとも申さず。年比としなれし弟子、つかへし下人だにも、皆にげ失せとぶらはざるに、聞きもせず、見もせぬ人の御志哀なり。偏に是別れし我が父母の生れかはらせ給ひけるか。」とあるのでもわかる如く、身近に仕えていた弟子や下人らも山を下り、この頃は音信がとだえ勝ちであったようである。文中に「聞きもせず、見もせぬ人」とあるので、太布帷を送った妙法尼の「あによめ」には、まだ顔を会わせていないことがわかる。太布帷を一つ供養されたのに対して、このように鄭重な礼状が出され、しかも長文にわたって法華経と諸経とを比較し、「法華最第一の経文」たることを説き示されている点からみて、いかに宗祖が、檀越の教化に重点を置いていたかが知れよう。届けられたご供養の品に感謝の意を表わすと云うだけではなく、△常説法教化▽の機会として握え、法門の解説が長文にわたって行われているので

ある。直接の対告衆たる妙法比丘尼の信仰心の篤かったことも、同時に窺えるのであるが、先きに妙法尼からは法華經に対する不審の点を尋ねて来たこともあったので、爰ではその事も含めた上で、一層長文な御返事となったものも考えられよう。最後に「彼女房の御歎きいかかとをしはかるにあはれなり。」と未亡人となった嫂の心情を察し、「弥々御歎き重り候らん」と歎きを俱にしているのである。

次に九月十九日には、上野殿から塩一駄と「はじかみ」(生薑)が送られて来た礼状が記されている。「今年は正月より日々に雨ふり、ことに七月より大雨ひまなし。」とあるので、弘安元年の前半は雨の日が多く、特に七月に入ってから大雨による被害も、各地では少なくなかったことであろう。前書に訪ねて来る人もない様子が書かれてあったが、こうした異状天候もその一つの原因になっていたことであろうと思える。四山四河の中に在って大雨が続けば、当然のことながら、山崩れや川止めとなつて、幾日間も道がとだえてしまつて、孤立状態となつたことが推察される。「長雨大雨時々日々につづく間、山さけて谷をうづみ、石ながれて道をふせぐ。河たけくして舟わたらず。」という通交遮断の折りには、山外からの人々による音信も思うようにかず、必然的に五穀もとほしく、窮乏の度を深めていった。七月頃は塩一升を錢百、又塩五合を麦一斗と交換することもできたが、九月に入つてからは、その塩も無くなり、「何を以てか買べき。味噌もたえぬ」と、食糧も底をついていた処へ、この塩一駄が届けられたのであった。「御志大地よりあつく、虚空よりもひろし。予が言は力及ぶべからず。」と感謝の辞を述べられている。昔から甲斐国では塩は貴重な品であり、生命を保つ上で不可欠の糧であった。殊に山中で通交不能な状況下にあつては、他の品よりも交換性は強かつたことであろう。お礼の意が言葉や紙上では「つくしがたし」と記している点からみて如何に大きなものであつたか、推察できよう。

次に同じく九月には、本尊に関する主要な述作とされている『本尊問答抄』がある。これは「清澄の浄願房へ御本尊を贈り玉ふに就て、其御本尊の旨趣を問答料簡して具に願し玉ふ」<sup>11)</sup>たものとされている。それは「貴辺は地頭のいかりし時、義城房とともに清澄寺を出でておはせし人なれば、何となくともこれを法華経の御奉公とおぼしめして、生死をはなれさせ給ふべし」<sup>12)</sup>との祖文に因っているものであるが、東条景信の怒りにあい、迫害を蒙ろうとした際に、宗祖を助けた時のことを、「法華経の御奉公」とみなしている。宗祖は浄願・義城の両名に対しては、機会ある毎に書信を送っておられるが、今回は曼荼羅御本尊を贈り、「此御本尊の御前にして一向に後世をもいのらせ給ひ候へ。」と述べている。

清澄寺は台密の寺である上に、当時流行した念仏信仰の波が、押し寄せて来ていたので、そうした状況下から、念仏に対し一秘の妙法を示し、「法華経の題目を以て本尊とすべし。」とされたものであろう。「一向に後世」を祈ると云う表現も、念仏往生の信仰を持っていた人に対する配慮も含まれていたのではないかと考えられる。従って、日本における十宗の本尊について述べ、特に真言破を中心として論を進め、法華経の題目をもって究極としているのである。またこの題目について、「当時こそひろまらせ給ふべき時にあたり候へ」と時期相応であることを明らかにし、更に弘める人についても、「日蓮は其人には候はねどもほほこころえて候へば、地涌の菩薩の出でさせ給ふまでの口ずさみに、あらあら申し況滅度後のほこさきに当り候也。」と仏使上行としての立場を暗示されている。ここでも「ひろめさせ」と云い、「口ずさみ」又は「あらあら申して」と云う表現からみてもわかる如く、△題目▽を中心とした御書であり、△本尊問答▽と云うテーマの中で、妙法曼荼羅本尊の中尊首題を特にとりあげて論じているものと解しえよう。

古来、この御書は八法本尊の根拠とされているが、優陀那輝師はこの点を「浄頭房もとより真言の学者故に、彼人の疑を遮し給也」<sup>(13)</sup>とし、更に「当機未熟の故也」としている。しかしこの点については、建治二年に遷化された旧師道善房のために著作され、浄頭房義城房のもとへ奉送された『報恩抄』にある「本門の教主釈尊を本尊とすべし」<sup>(14)</sup>と云う明確な一文との相違が問題となってくる。同一人に与えた御書の中で、前には仏本尊を示し、二年後には法本尊を説かれると云うのは、理解に苦しむ処でもあるが、単に当機未熟の故と云うだけではなく、望月敏厚教授も指摘しているように、「応病与薬の聖意」によるものと同時に「特定の個人を所対として授与した曼荼羅について説示されたもの」<sup>(15)</sup>だからであろう。即ち、三秘総在の妙境たる曼荼羅本尊にあっては、中尊の妙法五字七字の一大秘法が中心となっており、『本尊問答抄』では、この曼荼羅本尊を授与されて、その解説を主としているものとみることができよう。<sup>(16)</sup>

さて次に、九月二十四日には、大田殿入道殿女房へ記された御返事がある。乗明はこの頃すでに入道しており、妙日と称して夫人と共に宗祖への外護は篤いものがあつた。<sup>(17)</sup>「八木一石付十合者」とあるが、『啓蒙』によれば、「八木」は米のことであり、「十合」は十の箱入の物のことであると云う。<sup>(18)</sup>『金色王経』の一説を引いて、供養の功德を述べ、「此供養によりて現世には福人となり、後世には靈山浄土へまいらせ給べし」と結んでいる。<sup>(19)</sup>

またこの月には、「十月分時料三貫文、大口一、三貫五十云云」<sup>(20)</sup>とあって、摩訶摩耶経の一節を引用した『十月分時料御書』があるが、一紙七行の断片のため、詳細は不明である。ただ「十月分時料」とあるので、この頃、檀越の某家からのご供養が、四季を通じてあつたものと考えられる。

十月に入ると、一日付で富木入道殿への御返事が記されている。この書については『御書鈔』に、「常忍の給りなれば常忍抄とも云ひ、稟権境界の事を遊す故に稟権境界抄とも云也」<sup>(21)</sup>とある。又『啓蒙』には「此書御製作の年代不知、中山の御正本には題号これなし」<sup>(22)</sup>としている。一説には此の書は建治三年の述作であるとも云われている。「御文粗拝見仕候了」<sup>(23)</sup>と云う書き出しで始まっている点からみてもわかる如く、富木氏からの手紙に対する返書である。即ち天台の了性房との問答について、詳細な報告があつたことに對する御返事で、「日蓮が法門は第三の法門也」<sup>(23)</sup>とある如く、三種教相の第三師弟の遠近不遠近をとり挙げ、宗祖自身の法門所立を明示している。又大進房について「引かへし」て来たこと(転向)が述べてあるが、大進房がいかなる人物であるかは未詳であり、『御書鈔』でも「大進房と云は誰か。当宗欺他宗欺不<sub>レ</sub>慥可<sub>レ</sub>尋事也」<sup>(24)</sup>としている。しかし『啓蒙』では宗祖の弟子であるとし「三位房如きの不覚悟の者なりし事処々の御書に見へたるに、健抄に当宗欺他宗欺と云へるは鳥乱なる事也(乃至)大進房捨邪帰正の志出来たりとて用捨の言あるべからず」<sup>(25)</sup>とあって、富木氏の弟であると云う三位房日行のように不覚悟の者であるから、道理を強く書いて諫めるように富木氏へ書き送られたものであるとする説を立てている。

考えるに宗祖が竜口法難を経て、佐渡へ流罪される頃から、その強烈な在り方に対して、門下の中にはようやく退転する者が現れ初め、そのまま退転してしまつた者、或いは大進房のように一旦退転しておいて、「了性問答」等の契機により、再び捨邪帰正の念を起す者、或いはまた三位房や少輔房のように叡山へ出かけて、止観のとりことなり「後には天魔つきて物にくるう」<sup>(26)</sup>のような始末になつてしまつた者等さまざまなケースが生れたもので、この一抄もそ

うした一端を示しているものと云えよう。

次に、法華信仰に入信したため、主君の一門から何かと心よく思われていなかった四条金吾が、珍らしく主君より所領を給わたつたとの知らせが届き、鷲目一貫文が添えられて来た。殿岡の三倍にも及ぶ領地を給わたつたことに対する悦びの言葉と共に、心えなくてはならぬ諸点を、細く記して注意されている。<sup>(27)</sup>檀越の日常における信仰生活に対する指導はもとより、こうした時事の諸般に渡って、「心へ」を訓じられている点に、身延における宗祖の教化における配慮や、門下に対する心使いが窺えるのである。

「去文永八年の九月十二日子丑の時、日蓮が御勸氣をかほりし時、馬の口にとりつきて鎌倉を出でて、相模の依智に御ともありしが、一閻浮提第一の法華経の御かたうどにて有りしかば、梵天・帝釈もすてかねさせ給へるか。<sup>(28)</sup>」  
とある如く、竜口法難の時に宗祖と生死を俱にしようとした時のことを挙げ、仏に成る道もこのように、常に法華経につき従うべきであると述べ、「いよいよ道心堅固にして今度仏になり給へ」と勸奨している。爰にも師弟の法華信仰に徹した深い信頼と情愛の念が窺えるのである。然し、四条氏の「兄と弟はわれと法華経のかたきになりて、とのをはなれぬれば、かれこそ不幸のもの、とのの身にはとがなし」<sup>(29)</sup>とある点からみて、兄弟とは信仰上の一致をみず、必ずしも一族がこぞって法華信仰に帰していたとは云えないようである。

<sup>(30)</sup>十月も中旬を迎えた十三日には、富士の上野殿から、「いゝのいも一駄、柑子一籠、錢六百のかわり御ざのむしろ十枚」<sup>(30)</sup>が送られて来た。その御礼状によると、「去年は大えき(疫)此の国にをこりて、人の死ぬ事大風に木のうたれ、大雪に草のおるるがごとし。一人ものこるべしともみへず候き。」とあるので疫病が発生し、死者の数も相当に多く、不安な世相を呈していたようである。これは九月十九日付の上野殿宛の書簡にも見られるように、此の年は

雨も多く流行病の発生しやす状態であったようである。しかも八・九の両月に来襲した台風の影響で、作物が熟さず、生き残った人々も冬を越すことが困難であると思われる程であったことがわかる。このような時期での供養は、平時の場合と異って、余程の心掛けが必要であったことであろう。

また十九日には千日尼から、「青兎一貫文・干飯一斗・種々の物」が届けられた。「仏に土の餅を供養した徳勝童子は阿育大王と生れたり。仏に漿をまひらせし老女は辟支仏と生れたり」<sup>(31)</sup>と供養を讃している。はるばる佐渡からの供養であり、七月には夫の阿仏房が身延へ三回目の登詣をすませている。阿仏房夫妻は前にもふれた通り念仏からの転向であるため、法を表とし仏を裏にした教化がとられていると云える。即ち「法華経は十方三世の諸仏の御師也。(乃至) 尽十方世界の微塵数の菩薩等も、皆悉く法華経の妙の一字より出生し給へり。」と云う立場で仏は子であり法華経は父母であると云う法を中心にした教化であった。かつて弥陀念仏の徒であった者に対する方法としては、先ず仏よりも法(妙法)の勝れていることを明らかにし、法華経に帰依することの重要性を強調すると云う形がとられている。「法華経を供養する人は十方の仏菩薩を供養する功德と同じき也。十方の諸仏は妙の一字より生じ給へる故也」<sup>(32)</sup>とあって供養を讃すると同時に、妙の一字の勝れている事を明らかにし、法中心の立場を明確にしている。成仏の問題についても、「我等は穢土に候へども心は靈山に住むべし」と云う表現をし、何んとなく娑婆の穢土から靈山浄土を目指すようなニュアンスを漂よわせている。「いつかいつか釈迦仏のをはします靈山会上にまひりあひ候はん」<sup>(33)</sup>と云う文で結ばれているが、やはり念仏から法華へ転向した者への配慮が感じ取れる表現と云って差しつかえないのではなからうか。

また二十二日付で、四条金吾に宛た御返事がある。此の頃金吾は身延を訪れ、病身がちな宗祖に薬劑を調へ「所勞

平癒し、本よりいさぎよくなりて候<sup>(34)</sup>と云う状態にまでなつた。そこで鎌倉へ帰つた金吾から「錢三貫文・白米能米俵一・餅五十枚・酒大筒一小筒一・串柿五把・柘榴十。」が送られて来た。これに対する返礼の書簡である。「今年は疫癘飢渴に春夏は過越し、秋冬は又前にも過ぎたり。又身に当りて所勞大事になりて候」と云う身辺であつたので金吾の薬や種々の供養の品は、さながら「釈迦仏の貴辺の身に入り替らせ給ひて御たすけ候歟」と云える程の感じ方であつた。

それにつけても金吾の身の上を案じ、無事に鎌倉へ帰着したと云う知らせを受けるまでは、心も落着かなかつたことを述べ、檀越に対する心やりの深さが滲み出ている。道中の身の危険を案じ、「是より後はおほろげならずば御渡りあるべからず、大事の御事候はば御使にて承はり候べし<sup>(35)</sup>」とまで述べ、更に「敵と申す者はわすれさせて、狙ふものなり」と誡め、駿馬を選んで乗るように、旅の注意まで書き込まれている。

尚、此の御書は末文に「弘安元年戊寅後十月二十二日」と記されているが、真蹟も古写本も伝っていない。従つて文献学的には問題が残るかもしれぬが、内容の上からは問題となる点は見られず、何れかにかつて真蹟が伝つていた御書ではないかと考えることができよう。『録外考文』及び『徵考』には、「必仮心固神守則強書」となつて、「閏十一月二十二日書也。宝曆本尾云閏十月者、脱<sup>(36)</sup>二字也」と十一月二十二日説を立てている。

### 三 弘安元年十一月以降

次に、十一月に入ると九郎太郎へ宛た御返事が遣されている。これは一日付で真蹟が身延に所蔵されている。「いも一駄・くり・やきごめ・はじかみ給ひ候ぬ<sup>(37)</sup>」と秋の収穫の一部が送られて来ている。「これにつけても、故上野殿

の事こそ、をもひいでられ候へ。」と端書にある通り、故人となつた南条兵衛七郎のことを追憶されている。本文の中でも「念仏を申し戒をたまちなんとする人はををけれども、法華経をたのむ人すくなし。星は多けれど大海をたらさず(乃至)念仏は多けれども仏と成る道にはあらず。戒は持てども浄土へまひる種とは成らず。但南無妙法蓮華經の七字のみこそ仏になる種には候へ。(乃至)故上野殿信じ給ひしによりて仏に成らせ給ひぬ。」<sup>(38)</sup>と故上野殿の篤信を述べ成仏を証している。また「法華経は仏にまさらせ給ふ法なれば、供養せさせ給ひて、いかでか今生にも利生にあづかり、後生にも仏にならせ給はざるべき」とあつて、千日尼に対した時と同様に、法華経は仏よりも勝れている点を強調している。宛名の九郎太郎については、『考文』にも「南条兵衛七郎之一族歟。履歴不詳」となっており、南条家の一員であつたらうと考えられうる。

十一月も終ろうとする二十九日は、池上の兵衛志から「錢六貫文の内(一貫自三次郎一分)白厚綿小袖一領」<sup>(40)</sup>が届けられた。この人は「四季にわたりて財を三宝に供養し給ふ」と云う文から見ても判るように、従来も西谷へご供養の品々を度々届けていた。此の年の冬は又事の他寒波が厳しく、「法にすぎてかんじ候」と云う程であつた。雪も十月三十日に少し降つたが、十一月十一日から降り出した雪は十四日まで続き、大雪となつた事が記されている。この頃草庵における生活状況を次のように記している。

「昼も夜も寒く冷たく候事、法にすぎて候。(乃至)かんいよいよ重なり候へば、きものうすく食ともしくて、さしいづるものもなし。坊ははんさくして、風ゆきたまらず。しきものはなし。木はさし出づるものなければ火もたかず。古きあかづきなんどして候こそで一つなんどきたるものは、其の身の色紅蓮大紅蓮の如しこへははは(波々)大ばは地獄にことならず。」<sup>(41)</sup>

と云うのであって、ここでは寒苦にせめられ、さながら八寒冰地獄の一つである大波々地獄と同じであるとしている。この地獄は寒さを患う声（阿波波）からつけられた名であるが、厳しい寒苦にあうと身体が紅蓮のように変るといわれている。<sup>(42)</sup>紅蓮地獄の様相を示していると云うのであるが、これは送られて来た白厚綿の小袖に対する最大限の感謝を表したものとも考えられる。然し大雪のあとで訪う人もなく孤立した草庵では、実際にありえたこととみなすこともできよう。

また宗祖は自身の健康状態についても、「去年の十二月の三十日よりはらのけの候しが、春夏やむことなし。あきすぎて十月のころ大事になりて候しが、すこしく平癒つかまつりて候へども、やもすればをこり候」と述べている。先きの寒苦にせめられている表現も、実はこうした病苦と重なり合って、一層身にしみておられたものと考えられる。ここでは少なくとも西谷の生活が、物質の面からも又健康上からも、決して恵まれた環境ではなかったことを知ることができる。宗祖は既にこの年の十月「はらのけ」で大事にまで至ったのであるが、前記四条金吾らの薬劑により、一時恢復を見るも、その後一進一退を続けておられたようである。病身の宗祖にとっては、この冬の寒苦はこのほか厳しいものであり「地獄にことならず」と云ういつわらざる情況となったものであろう。純粹に宗教的体験から来る入法悦の境界とは又別に、「人間日蓮」としての現実をとらえ、病苦の中に生きた一日一日の生命の記録とも云うべきものであったとみることできよう。

西谷から発せられた消息文の中には、こうした晩年における九年間の実生活についての記録があり、生きて来られた「しるし」の文章もあって、そこには宗祖の血潮のしたたりが感じとれるものが多いと云えるのである。これはあくまで崇高な入仏使としての一面に即しつつ、その中に入人間日蓮としての反面をいだかれたものであり、この

祖書もその面目躍如たるものを感じとることができるのである。文中にも凍死する者が続出している状況を述べて、「をもひやらせ給へ」と訴え、兄弟二人から送られた綿入りの小袖についても、「こそでなくば、今年はごごへしに候なん」と記している。大波波地獄の寒苦を救ってくれた小袖に対する感謝の情が、いかに大きいものであったかを知ることができる。この御返事を受信した兵衛志にしてみれば、財施の功德の大きいことに、これ又限らない法悦を感じとることができるであろう。信徒の身としてこうした書簡を給わたとしたら、感激も一入であり、益々信仰の道を励むことになろう。宗祖の『御返事』は単なる御礼状にとどまらず、進んで信仰の道に精進せしめるように、信心増進の念を燃えあがらせるための教化が、文の端々から窺えるのである。そのために特に用いられた表現と考えられる面もあるが、然しそれは教化上における化儀として素直に受けとめて行くべきであろう。

さて、この頃の西谷草庵には「人はなき時は四十人、ある時は六十人」もの人々が、雪のない時などは慕い寄せて来ていたようである。「心にはしずかにあじちむすびて、小法師と我身計り御経よみまいらせんとこそ存て候に、かかるわづらわしき事候はず。又としあけ候わば、いづくへもにげんと存じ候ぞ。」とまで考えられる程であった。この文からみても判るように宗祖は、西谷で心静かに法華経の読誦三昧を願っておられたのであり、必ずしも大勢の弟子檀越に囲まれて、賑やかな生活することを望んではいなかったのである。「かかるわづらわしき事候はず」と云う言葉を重ねて用いているが、人の出入りが激しくなることは、わづらわしさを増すこととして歓迎されなかった模様である。尚、弘安二年八月の『曾谷殿御返事』には、「一百よ人の人を山中にやしなひ」とある。

次に此の年間の祖書と目されているものがこの他にも六篇あるが、その中の五篇までは著作の年月日がなく、又断片のため途中で文章の切れているものもある。即ち、その中の一つ『食物三徳御書』は、真蹟三紙の断簡である。こ

の御書は前後の文章が缺けてしまっているので、正確な著作の月日は不明である。「食には三つの徳あり。一には命をつぎ、二には色をまし、三には力をそう。人に物をほどこせば我身のたすけとなる。譬へば人のために火をともしば、我がまへあきらかなるがごとし<sup>(43)</sup>」と食に関する三徳を挙げ、布施の勸奨をしている。

また『師子王御書』は真蹟六紙の断簡であり、これも前後が缺けているため、著作の月日は不明である。「我弟子等は師子王の子となりて群猿に笑はる事なかれ<sup>(44)</sup>」と述べ、身を捨て強敵に立ち向う心構えの大事を示している。

次に『随意御書』であるが、これも末尾の真蹟が缺けているため、月日の表示がない。但し末文第二十七紙には「山中の法華経へ孟宗がたかな(筍)ををくらせ給ふ。福田によきたねを下され給ふか。なみだもとどまらず<sup>(45)</sup>」とあるので、恐らくは富士近辺の檀越が、五月の筍のシーズンに西谷へご供養として送り届けられたものへの返礼文

であると考えられうる。真蹟が富士大石寺に所蔵されている点からも、この感が一層深いものとなる。「法華経と申すは随意と申して仏の御心をとかせ給ふ<sup>(46)</sup>」とあり、諸経の随他意たることをわかりやすく解説している。尚、文中に「隋の代に智顛と申す小僧あり、後には智者大師とがうす」と天台に関する記述があるが、これは『本尊抄』の第十八問に天台大師を、「辺鄙の小僧<sup>(47)</sup>」と述べ、随自随他の説を立てているのと共通した筆法と云うことができよう。

また大学三郎に与えられた一紙の断簡がある。「大がくと申す人は、ふつうの人にはにず、日蓮が御かんきの時身をすてかたうどして候し人なり<sup>(48)</sup>。」と見え、大学三郎の人となりを探ることができよう。「大学殿は坂東第一の御てかき」とあるので、坂東に於ても名の通った人であつたらう。捨身の外護者となつた篤信の一人である。

同じく真蹟一紙の断簡『衣食御書』がある。封書に「尼御前御返事」とあるので、尼御前宛の書簡であることはわかるが、姓名については不詳である。「舊日一貫給ひ候了んぬ<sup>(49)</sup>」とある点からみて、御礼状の一節であることがわか

る。先きの『食物三徳御書』と共通した文面でもある。恐らくその前後頃の祖書ではないかと考えられうる。

さて、弘安元年も歳末に近ずき、残り少なくなつた十二月廿一日に、「ほりの内殿」から、「十字三十」と「すみ二俵」が送られて来た。<sup>(50)</sup>正月用の十字は「法華経の御宝前につみまいらせ候ぬ」とあるので、庵室の内陣には法華経八巻が祀られていたことであろう。恐らく信者の一人「ほりの内殿」が、正月用にと餅を送り、御歳暮として炭を二俵届けて来たことに対する御返事であろう。一紙完の真蹟であるが、返礼の要用のみを記したものであり、極めて簡略な返信であつて、宗祖の返書としては珍らしく短文である。身延生活中に数多く信徒から、さまざまな御供養を受けられているが、こうした要用のみの御返事は少なく、たいがいの御返事には返礼としての文面の外に、法を説かれた教化が、ほとんどの場合記されている。即ち、財施に対する法施がおこなわれているのが多く、此の書のような返礼のみの形式は数少ないものである。又宛名の「ほりの内」は、恐らくはこの人の住していた地名ではないかとも考えられる。尚、『録外考文』によると、「堀内者南条氏居処也。或云、北条時宗之室矣。以<sub>二</sub>地名同<sub>一</sub>。或為<sub>二</sub>其人<sub>一</sub>。按南条氏居処是歟」として、南条氏ではないかと見ている。<sup>(51)</sup>

かくして弘安元年も、大雪や寒波に見舞われつつ、各檀越の外護を得る中に、しづかに暮れて行つたのである。この一年間の西谷は、多い時は六十人をこす信徒や弟子でにぎわう時もあった反面、大雪に閉ざれたり雪に囲まれてひっそりとした寒苦の日々もあり、繁閑の日が入り交つたご生活であつたことがわかる。宗祖自身にとっては、又病状の一進一退した一年でもあつた。

〔註〕

- (1) 『録内啓蒙』 二四一八〇頁
- (2) 『御書鈔』によると、「妙法比丘尼ノ兄ヨメ也。」とし「御返事ノ消息ナレハ随レ機文章モ浅ク指タル事無キ也。」(十四一六)と記している。
- (3) 妙法比丘尼御返事 昭定 一五五三頁
- (4) 清水市海長寺藏(「御本尊集目錄」立正安国会編八〇頁)
- (5) 京都市本願寺藏(同 八五頁)
- (6) 『御本尊集目錄』(立正安国会編七二頁以下参照) 弘安二年に入っても九月までの曼陀羅には「三十余年」とあり、十月からは又「二十余年」の曼陀羅が見られる。
- (7) 妙法比丘尼御返事 一五六二頁
- (8) 同 一五六三頁
- (9) 『樓神』第四八号六一頁の拙論を参照されたい。
- (10) 上野殿御返事 一五七一頁
- (11) 『録内啓蒙』(二〇一―二七)。『御書鈔』(九一―四一)
- (12) 本尊問答鈔 一五八六頁
- (13) 『妙宗本尊略弁』 充全 三三三―三七頁
- (14) 報恩抄 二四八頁
- (15) 『日蓮教学の研究』(望月歎厚著) 一六四頁
- (16) 本尊勧誦の形態については、『印度学仏教学研究』(第九号)及び『樓神』第三十一号の拙稿を参照されたい。
- (17) 乘明聖人御返事 一三〇〇頁
- (18) 『録内啓蒙』 三四―四九頁
- (19) 大田殿女房御返事 一五八七頁
- (20) 十月分時料御書 一五八八頁
- (21) 『御書鈔』 二三一―二六頁
- (22) 『録内啓蒙』 三三一―二七頁
- (23) 富木入道殿御返事 一五八九頁
- (24) 『御書鈔』 二三一―三〇頁
- (25) 『録内啓蒙』 三三一―二七頁

(26)	法門可被申様之事	四四八頁
(27)	四条金吾殿御返事	一五九三頁
(28)	同	一五九四頁
(29)	不幸御書	一五九五頁
(30)	上野殿御返事	一五九六頁
(31)	千日尼御前御返事	一五九七頁
(32)	同	一五九八頁
(33)	同	一五九九頁
(34)	四条金吾殿御返事	一六〇〇頁
(35)	同	一六〇一頁
(36)	『録外考文』二一一。『微考』	上—六頁
(37)	九郎太郎殿御返事	一六〇二頁
(38)	同	一六〇三頁
(39)	『録外考文』	四—七頁
(40)	兵衛志殿御返事	一六〇四頁
(41)	同	一六〇六頁
(42)	『望月仏教大辞典』	三五七—四頁参照
(43)	食物三徳御書	一六〇七頁
(44)	師子王御書	一六〇九頁
(45)	随意御書	一六一一頁
(46)	同	一六一一頁
(47)	観心本尊抄	七〇八頁
(48)	大学三郎御書	一六一九頁
(49)	衣食御書	一六一九頁
(50)	十字御書	一六二〇頁
(51)	『録外考文』	八—四九頁